

令和7年度「校内サポートルーム(KSR)研究指定校事業」 成果報告書

1 指定校・指定校群 (高松市立栗林小学校)

2 実施の内容

(1) 学習指導について

それぞれの児童の状態に合わせて、KSRでの個別学習、オンライン授業、通常学級への参加など複数の学習形態を柔軟に組み合わせ、児童が「学びたいときに学べる」環境づくりを進めた。KSR教室にはタブレットやテレビを設置し、デジタル教科書も活用できるようにしたため、KSR担任による授業や専科による外国語のオンライン授業を行った。朝の会では、児童が「今日の心の状態」を1～10で表す健康観察を行っている。これは、その日の心の状態をKSR担任が把握し、支援に生かすためである。そして、その日に取り組むことは、その時の心の状態に合わせて、自己選択・自己決定をしている。一人で決めるのが難しい児童は、KSR担任と一緒に相談して決めている。朝の会の後にはラジオ体操を行い、体を動かすことで気持ちを整え、学習へ向かうエネルギーを少しずつくれるようにしている。

(2) なかまづくり、居場所づくり

KSRを利用する児童は、不安を感じやすい子が多い。そこで、まずは、KSR担任や養護教諭が児童の安全基地となれるよう支援した。そして、児童の社会性を育てるために、異学年の小集団で活動し、お互いに関わり合う経験を積むことを大切にしている。みんなで活動する時間を「のびのびタイム」と設定した。「のびのびタイム」では、季節の飾り作り、カードゲーム、構成的グループエンカウンターなど、遊びや活動を通して、子ども同士が自然に距離を縮められるよう工夫している。また、栗林公園への校外学習も5月、10月、11月の3回実施した。栗林公園への校外学習では、掬月亭でお抹茶を飲んだり、芝生広場でマインドフルネスをしたりするなど、自然を感じながらリラックスする方法を体感した。

(3) 所属する学級との連携、教職員のKSR児童との関わり

本校では、「不登校児童支援計画書」を学級担任が作成している。支援の方針については、担任とKSR担任とで話し合いながら作成した。KSR担任と学級担任の連携を重視し、毎日の活動記録を学級担任へ共有し、週に一度は管理職にも共有して、学校全体でKSR児童を見守る体制を整えている。休み時間や給食の時間には、学級担任や友達、管理職、学校事務職員、授業で関わる職員、養護教諭などがKSRへ訪れて、声を掛けたり、関わったりする姿が多く見られる。たくさんの人に関わってもらっていることは、児童にとって大きな安心感となっている。KSR児童と関わる教職員は、受容・共感・寄り添いを大切にしながら、児童と関わっている。

(4) 養護教諭、スクールカウンセラーとの連携

不登校のアセスメントは、スクールカウンセラーなどの専門家でも難しいと言われている。だからこそ、KSRを利用している児童の保護者全員をスクールカウンセラーとつなぎ、定期的に教育相談をしてもらうようにした。また、2か月に1回程度、KSRでスクールカウンセラーによる授業を実施した。ふだんの児童の様子をスクールカウンセラーに見てもらうようにした。KSR担任も適宜、スクールカウンセラーに児童との関わり方の助言をいただき、支援に生かすようにした。

本校には、KSRの利用までは至らないが、保健室で少し休むと教室で学習に参加できる児童も数名いる。保健室は、一時的な休養場所としている。不登校の未然防止をするために、保健室にも学習スペースとリラックススペースをつくった。保健室登校の児童は、養護教諭が安全基地となり、本人の気持ちを尊重しながら、学級担任と連携して教室にいけるよう支援している。

3 成果

(1) 校内サポートルームにおける児童の様子

○ 環境づくり

- (ア) KSRの教室掲示は、通室児童が「安心してここにいていいんだ」と思えるような教室掲示を意識して行った。のびのびタイムにみんなで一緒に作った季節の掲示物やのびのびルームでの思い出の写真、イラスト、塗り絵、折り紙など児童が作ったものを壁面掲示した。そして、管理職や他の教職員が来室時に、作品を褒めるなど児童とのコミュニケーションにつなげた。
- (イ) KSRにカードゲームやおセロ、折り紙、スクラッチアート等気軽に短時間で遊べるものやぬいぐるみ等のリラックsgグッズを置くことで、KSR児童同士の交流を深めることができた。遊びの中で、コミュニケーションの楽しさを感じるなど社会性が育まれている。
- (ウ) 保健室とKSRがすぐ近くにあるのは、KSRを利用する児童や保護者にとって、大きな安心感となっている。悩みのある児童は、KSR担任だけでなく、養護教諭にも聞いてもらうことが数回あった。部屋が近くにあることで、KSR担任と養護教諭も連携をとりやすかった。
- (エ) TVやタブレット、プリンター、イヤホン等のICT機器をKSRに設置し、校内放送や学校行事等をTVで視聴したり、イヤホンをつけてオンライン授業を受けたり、タブレットで調べ学習を行ったりすることができるようにし、児童が落ち着いて学習に取り組めるようにした。

○ KSR担任の意図的な支援

- (ア) KSR児童の毎日のスケジュールは、児童自身が自己選択・自己決定し、それを尊重した。1人で計画できない時はKSR担任が助言した。また、少しずつ教室で生活したり、学習したりできるようにするために、児童の様子を見ながら、教室へ行く働きかけをした。最初に行く時は、KSR担任と一緒に教室に付いていくようにした。そうすることで、少しずつ教室へ行く時間が増えた児童もいた。
- (イ) 朝の会の時に、今日の心の状態を1～10で表す健康観察をしたことで、高学年の児童は、自分の体調に合わせて今日することを自己決定できるようになった。「今日は元気が2だから1時間目はゆっくりして2時間目からがんばる」などと自分で言えるようになった。そして、KSRを利用する児童が自分の体調に合わせて自己決定することはとても大切なことだと考えている。
- (ウ) KSR担任が、学級担任とKSR児童との架け橋になることで、学級担任との距離を縮めることができた。また、KSRを利用している児童に会いに来てくれる児童とも関係を築いていくようにした。教員が誘ってもクラスには行かないけれど、友達が誘うと行ける児童もおり、通常学級にいる児童の力を借りながら支援した。他にも、欠席が続いた児童は、学級担任、KSR担任、児童の3人で、Teamsでつながり、会話をする児童もいた。学級担任や学級の友達との距離を縮めたことで、教室に入れなかった児童が教室に入ったり、行くことができなかった授業や給食に行ったりすることができるようになった。
- (エ) KSR担任は、KSR児童の思いをしっかり聞くことで、児童との関係が深まった。また、なかなか自分の思いを伝えることができなかった児童も心を開き、話をしてくれる関係となった。
- (オ) 児童にはよく「心がしんどい時は体を動かすと少しずつ元気になるよ」と話をしている。朝、8時30分まではなわとびや一輪車など児童の好きな運動をするのも可とした。そして、8時30分から朝の会をして、最後にラジオ体操をすることで、体が少しずつ目覚めて、元気になっていくように働きかけた。

(2) 校内サポートルームにおける活動及び支援の工夫

○ 登校意欲をかきたてるイベントの設定

登校意欲をかきたてるイベントの設定も行った。香川県教育委員会の支援を受け、NPO法人UKドッグセラピー協会遠藤先生によるドッグセラピーを月1回ペースの9回実施した。ドッグセラピーでは、毎回事前アンケートと事後アンケートを行った。アンケート結果を見ると、毎回、ポジティブな感情が増える児童が多くいた。また、ドッグセラピーがあることで登校できる児童もいた。他に

も、養護教諭によるアートセラピーや保護者によるアートワークショップを実施した。また、栗林公園にも3回校外学習へ行ったり、ハロウィンパーティーやクリスマスパーティーも行ったりした。イベントで登校への意欲につなげ、KSR児童同士の交流を深めることができた。そして、KSR児童の表情も明るくなったり、自分の思いを安心して話せるようになったりした。

○ なかまづくり

なかまづくりを意識して活動したことで、児童の中でも所属感が生まれた。中には、KSRでいることが楽しく感じ、登校日数がかかなり増えた児童もいる。また、低学年では、泣かずに登校できるようになった児童もいる。

他にも、上級生が下級生との関わりから、下級生に優しく関わる態度が少しずつ育ってきている。

○ スクールカウンセラーとの連携

KSRを利用する児童の保護者全員をスクールカウンセラーとつなぎ、定期的に教育相談をしたことは、大きな不安を抱える保護者にとって、安心感につながった。そして、スクールカウンセラーの助言により、保護者、教員が支援の仕方を変えたことで、児童の心の安定につながった。

(3) 総括

【KSR担任として】

○ KSRでの楽しい思い出はいつか心の支えとなる

少しでもKSRで過ごす時間が楽しく豊かな時間になることは、いつか児童が成長したときに、心の支えとなると信じてKSRの学級経営を行った。

【社会的な自立にむけて】

○ 学習の保障と同じぐらい心の面でのサポートが重要

不登校児童の学習保障が大切だと言われているが、不登校児童は学習の保障と同じぐらい心の面でのサポートが重要であると考えている。そのためにも、不登校児童は保護者と教員だけでなく、スクールカウンセラーなど専門家と保護者を必ずつなぎ、適切なアセスメントをしながら、児童と関わる大人で支えていくことが重要である。家庭・学校で安心できる居場所をつくるのが、児童が回復へ向かう第一歩である。

○ 学校で必要なのは「自立への一歩」

「社会的自立」は最終ゴールであって、学校で必要なのは、「自立への一歩」である。「自立への一歩」に向けて、今学校でできることは何なのか、目の前の子どもの実態をよく見て、チームで連携をとりながら支援することが大切である。

○ 高学年の不登校はターニングポイントと考える

「不登校」は取り返しがつかない失敗でも挫折でもない。その子が立ち止まることで自分自身や将来のことを考えるためのターニングポイントと考えることも大切ではないかと思う。しかし、苦しい道を寄り添ってくれる伴走者が必要である。家族や教員、スクールカウンセラーなど大人の支えの存在が重要である。また、不登校児童をもつ保護者は本当に悩まれている方が多い。そのような保護者を支えていくことも大切である。

【組織的な支援体制】

○ 低学年児童の不登校と高学年児童の不登校の対応について

本校のKSRで最も悩んだことが、1～6年生まですべての学年の児童が通室しており、低学年と高学年では、発達段階が違い、教室に行けない理由が違うため、対応が異なるという点である。低学年の場合は、児童の安全基地となる人を決めて、「安心感」の回復を図ることが大切である。しかし、保護者の協力がなくては回復できないため、スクールカウンセラーと連携しながら、保護者にも子どもへの関わり方を直接助言いただいているところである。

○ 組織的な支援体制について

11月からKSRの通室人数が増えて、2つの部屋を活用することとした。さらに、学習ルーム1、学習ルーム2、リラックスルームとして区切り、活動内容や学年に応じた環境を整えた。2室になったことで、KSR担任のみで対応することが難しかったため、空き時間の教員を配置し、2人体制でKSRの運営を行うようにした。

児童は、学級担任以外の教員に見守られることに不安も少なく、やや固定しがちな教室環境であったことから、むしろ朗らかな変化も見られた。また、当該教員にとっては、KSRについて理解を深める機会となった。しかし、教員の空き時間を活用した支援体制を構築することは、校務運営上の工夫ではあるが、KSR担任としては、なかなか心苦しいところもあった。